



## 年間第 32 主日 (マタイ 25:1-13)

あなたの「最後の授業」を聞かせてください

本日「黒瀬の辻殉教祭」が午後2時から予定されています。説教師はわたしなので、田平教会での説教も大枠は「黒瀬の辻殉教祭」の説教を使わせていただきます。

世界中でブームになっている授業があります。「最後の授業」というものです。「引退を迎えた教授が、お別れの日におこなった授業」ではありません。現役バリバリの教授が、「もし余命数日の宣告が下されたら？」というような設定で、すべてを賭けておこなう授業のことです。

最初にこの授業をおこなったのは、余命半年のがん宣告を医師から受けたランディ・パウシュという教授でした。彼は余命半年でありながら、希望に満ちた、エネルギッシュな授業を展開したのです。死にゆく人のメッセージではなく、聞く人にやる気を起こさせる授業でした。

先に「黒瀬の辻殉教祭」の案内をしました。この殉教祭は言わば「福者西家族を思い起こし、物語るためのミサ」です。わたしはこの説教を考える準備として、黒瀬の辻で殉教した西家族について、殉教から400年を迎えた2009年に山田教会で発行された「生月の殉教者・福者ガスパル西玄可とその家族」という青い冊子を注意深く読みました。冊子を読んだ上で、400年前を振り返るだけでなく、出来事を今どうやって生きたらよいかを付け加えて話してみたいと思いました。

冊子を読んでわたしが考えたことは、西玄可とその家族は、決してこの世を捨てて、この世に背を向けて生きていたのではないということです。時代はキリシタンにとって完全な逆風だけれども、正面から逆風に立ち向かって生き続けた人たちです。「この世に興味がないから、命を取り上げるのであればどうぞ。」そんな生き方を選んだではありません。誠実に日々を生きて、生き方を曲げることなく貫いたのです。

わたしは、西玄可とその家族の最後の日々は、彼らが日頃から用意していた「最後の授業」だったのだと思っています。「どうせもう死ぬから、これだけは言っておこう」という気持ちで立てた証ではなくて、命に満ち満ちた、花が満開に咲いた状態で、すべてを賭けておこなった授業だったと思っています。

当時ほとんどの人が、西家族の「最後の授業」を理解しませんでした。救い主イエス・キリストのために命をささげることが、命を投げ捨てることのように思えたからです。本当は理解できたはずなのですが、伝統やしきたり、面子など自分を縛っているものから解放されるのを怖がっていたのかもしれない。

殉教祭の参加者は違います。黒瀬の辻に集まってくださるということは、西家族の「最後の授業」をもう一度聞きたい、そう思って集まるはずですが、もしそうでなければ、ほかにすることはいくらでもあったはずですが、それらをなげうって殉教祭に集まってくれる。西家族の「最後の授業」に価値を見つけたからです。同じ時間に放送されているテレビ、

ラジオよりも、聞く価値があると考えたからここに集まっているのです。

ランディ・パウシュの「最後の授業」を受けた人たちはどうなったのでしょうか。授業を受けた人たちは、別の友人知人に、授業から学んだことを伝える人になりました。「最後の授業」をこなした教授に倣って、自らも「最後の授業」ができる人になったのです。

「最後の授業」を受けた人たちとわたしたちを重ねてみましょう。わたしたちが殉教祭に集まるなら、西玄可とその家族が命を賭けておこなった「最後の授業」を聞くことになります。そうであるなら、わたしたちもまた、友人や知人に、殉教祭で感じたことを伝えるべきです。

もっと言えば、わたしたちも西玄可とその家族に倣って「最後の授業」ができる準備を整えておくべきです。わたしたちが生きる気力に満ち満ちているときに、現役バリバリの時に、人生の終わりなどこれっぽっちも考えない時に、「最後の授業」を用意しておくべきなのです。「これ以上はできない」という最高の授業を、いつでもどこでも、だれにでもできるように、心の準備をしておきましょう。

「最後の授業」のテーマは自由です。与えられた福音朗読では、十人の乙女たちが「ともし火」を消さないように注意を怠りません。「ともし火」は、聖霊だと考えてみました。聖霊がわたしたちに与えられ、その大切さは十人とも理解できたのです。愚かな乙女さえも、「油を分けてください。わたしたちのともし火は消えそうです」（25・8）と言ったのです。

賢い五人は聖霊の火をともしつづける「油」を持っていました。「油」とは何でしょうか。それは、常日頃から準備しておく「最後の授業」「わたしなりの信仰の表し方」です。この油があって初めて、わたしたちは「聖霊の火」を人々にともし続けることができるのです。

わたしは釣りが大好きで、一週間に八日間出かけたいくらい好きです。わたしの釣り場は、水深40mから50mのところですが、そこでキジハタやタイを狙っていますが、40m先の、ほんのちょっとした変化を見逃さないことが釣果を左右します。

人間の世界では40m程度ですが、神さまは人間を救うために、神さまに背を向けて離れてしまっている人間の、ちょっとした変化に神経を研ぎ澄ましています。果てしなく遠ざかっている罪びとが、一度だけ神さまに向き直った。それを神さまは決して見逃しません。その人が心を入れ替える「一生に一度のチャンス」を見逃さないのです。

これで、趣味の釣りを題材に「最後の授業」ができました。いかがですか？あなたの身の回りで起こっていることを話題にして結構です。いつチャンスが巡ってきてもよいように、あなたがどのように神さまを信じているのか、だれにでも話せる準備をしておいてください。

あなたにとっての「一世一代の授業」は、今日やってくるかもしれませんし、三年後かもしれません。西玄可とその家族は、いつでもその準備ができていました。わたしたちも、神さまをどのように信じているかを、自分の言葉で話せるように準備を整えておきましょう。